

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006-2009

課題番号：18530571

研究課題名（和文） 身体動作表現の映像美に関する実験心理学的研究

研究課題名（英文） A study of experimental psychology on the beauty of human body action in motion pictures.

研究代表者

前田 英樹（MAEDA HIDEKI）

立教大学・現代心理学部・教授

研究者番号：20181589

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：感覚・知覚、映像美

1. 研究計画の概要

(1) 目的 今日ヒトを取り巻く環境には映像があふれている。現代人は日常の読み書きの道具として映像表現を用いており、動画は文字や音声の表現のみでは限界のあった直接的な経験としての「意味」を表現している。映像の積極的活用を通じて人間の生活の質を向上させることができないだろうか。映像を伝える技術に関する研究はさまざま見られるが、映像が伝える内容や意味そのものに関する学術的研究は決して多くない。ここには現代心理学の大きな課題があると考えられる。本研究では、2006年4月に新設された立教大学現代心理学部映像身体学科の研究・教育、および立教大学アミューズメント・リサーチセンター（RARC）による表現技法のアーカイブ化事業と連携して、映像による身体動作表現の美しさについて考える。

本研究は、今日の映像表現の基礎に映画制作者の発明した「映像編集（動画像配列）」の技法がある点に着目し、心理学における認識論（知覚論）の観点から映像美の実証的な理解を目指す。本研究の実験的検討では、1）実験心理学の手法によって時系列上の動画像間に「できごと」の知覚的まとまり（事象の群化）が成立する条件を探り、2）事象の群化が映像の美的評価にどのような効果を及ぼすのかを実証的データと理論的考察の両面から検討する。さらに心理学的知覚論の骨子にある知覚の、1）現象論、2）機能論、3）機構論という3つの体系を包括する実践的な活動を展開する。特に、動画像系列に生じる「できごと」の知覚的まとまりが映像表現における視覚的な意味創出の起点になるという考えに基づき、映像の、1）事例研究、

2）制作、3）実験、4）教育への応用を行う。これら4種の活動を心理学的知覚論の枠組みで統合する。

(2) 方法 映像表現のなかでも最も基本的な身体動作の表現を検討する。動画像の提示により身体の動きを表現する手法が様々ある。身体動作を表現した映像の体験（みえ方）には、1）情動反応（迫力が感じられる）、2）事象知覚（何をしている動作なのかが正確に認識できる）という2つの次元があるように思われる。情動と事象を相互に表現できる映像は動画像配列の技法を巧みに用いて制作されており、制作に要した資源の多少に関わらず高い美的評価を得ている。連続提示された動画像の群化（まとまり）による身体動作の表現が映像の美的評価に影響を及ぼすと考えられる。この仮説に基づき、本研究では、1）動画像群化の規定要因を種々の異なる条件下で検証・確認し、2）動画像配列による身体動作の表現が映像全体の美的評価に及ぼす効果を明らかにする。1、2の知見を整理することにより日常的な映像制作の現場での応用を目指し、3）実際の映像制作において低資源で効果的に美しい表現を成立させる方法を考察する。

2. 研究の進捗状況

(1) 事例研究 映像による身体動作表現の美しさを心理学の観察手法を用いて検討してきた。複数の事例を検討し、実験によって検討すべき問題を明確化した。

(2) 実験映像の制作 被写体の運動により構成した。映像の種類は、1）実写、2）CGの2種類とし上述の内容を両条件で可能な限り統制した。動画像配列の種類は、1）

単独提示、2)連続提示の2種類とした。予備的検討を進めてきた表現の事例に基づき、被写体が移動する条件で検討を行った。

(3) **表現技法の供覧** 当初の計画では、制作した映像をDVDソフト化し実験に用いる予定であったが、画質の問題から、現状ではDVテープを用いた実験を行っている。

(4) **実験** 運動の連続性と被写体の同一性を測度として観察者が知覚する事象を測定する実験を行ってきた。

2006年度は、先行研究と予備観察より、基本的な概念を仮説的にまとめ、実験に着手した。2007年度は、動画像の群化法則に関する検討を継続した。「提示時間と画面幅の比率」を独立変数とした動画像群化の検討を基盤に、映像制作への応用に有効な動画像群化の分析単位を検討した。2008年度は、これまで得られた実験結果をまとめ、理論的考察を行った。従来の知覚心理学の研究では考察されてこなかった「事象の体制化」という新しい概念を考察し、動画像系列の知覚体制化理論の概要を再検討した。

(5) **実制作と教育への応用** 表現技法の教育現場で本研究の経過に基づく身体動作の表現技法について解説を行い、実践的な映像制作のワークショップを開催してきた。また、立教大学アミューズメント・リサーチセンター(RARC)を通じて海外の研究者を招いた研究サロンを開催してきた。さらに、立教大学現代心理学部映像身体学科の特別講義科目と演習科目として、分担研究者による新たな教育の場を設け、新しい教育手法の開発を進めている。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している

これまでの研究では、1)事例研究、2)実験的制作に基づき、3)動画像の群化法則に関する検討を集中的に行い、理論的考察まで研究を進展させることができた。理論的考察により、4)映像の美的評価に関する実験の準備を整えてきた。5)実制作と教育活動への研究成果の応用も進めており、2009年度はこれまで学内外で行ってきたワークショップの成果を、学内の正課授業に活かせる体制が整った。

4. 今後の研究の推進方策

(1) **美的評価に関する実験** これまでの研究成果をまとめる目的で、映像美の評価実験を行う。これまでの成果を活かし事象を変化させた映像ごとに美的評価を測定する。

(2) **供覧コンテンツの制作** これまでの成果を供覧できるDVDコンテンツを制作し、アーカイブ化する。立教大学アミューズメント・リサーチセンターのアーカイブ事業と連携する。

(3) **報告書の作成** これまでの成果に、上述の美的評価に関する実験と供覧コンテンツの制作を加え、最終年度の報告書を刊行する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 鈴木清重・増田知尋・長田佳久 (2007). 動画像系列の知覚体制化に関する実験心理学的研究(1) 基礎心理学研究, **25** (2), 149., 査読なし
- ② K. Suzuki, T. Masuda, Y. Osada (2007). The perceptual grouping in a series of motion picture shots [Abstract]. *Perception*, **36** (Suppl.), 21., 査読あり

[学会発表] (計 3 件)

- ① 鈴木清重 動画像系列の知覚体制化理論-“映像”の体験を語ることば- 日本心理学会第72回大会 ワークショップ041「対象と事象の知覚体制化を再検討する」, 北海道大学, 2008年9月19日(発表論文集, W23)

[図書] (計 2 件)

- ① 前田英樹 (2008). 身体から機械映像へ立教大学映像身体学科(編) 映像と身体-新しいアレンジメントに向けて- せりか書房 pp.191-210.
- ② 前田英樹 (2007). 言葉と在るものの声 青土社 247 ページ

[その他]

収集した動画像作品の表現事例と、実作した動画像のデータをまとめている(公開準備中)。

- ① 鈴木清重 (制作) (2007). 『映像編集を体験してみませんか?』(DVD-Video:試作版) 立教大学 & 桑沢デザイン研究所 (未公開)